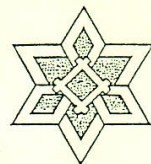


ふくい

舞鶴市立福井小学校

令和4年12月23日発行

(本年度10号)



目指す子ども像
心も体も鍛える子

2学期終業式

第2学期始業式では「2学期は多くの行事があります。何事も諦めないで一生懸命頑張りましょう」と話をしました。粘り強く最後まで努力し、常に向上心を持ち日々を積み重ねる事が、自らを鍛える事に繋がります。2学期を振り返ると、子ども達は学習や行事にしっかりと向き合い、自分を鍛えながら成長しました。運動会では、練習の成果がしっかりと感じられ、一人一人が役割を果たしながら活躍しました。その他、自分の力を惜しみなく発揮し、力走する姿が見られたマラソン大会や、各学年の良さを生かしながら素敵な発表をした音楽集会。「きずなフェスタ」では、6年生リーダーを中心にアイデア溢れるブースを開き、上級生が下級生を優しくサポートし手本となって頑張りました。今年はPTA本部役員の方々にも「箱の中身は何だろう？」コーナーをお世話になりました。箱の作りや中身を工夫し、ときどき本部役員ご自身が箱の中に入るなど、行事を楽しく盛り上げていただきました。また、相手の立場に立った思いやりをテーマにした人権旬間の学習では、自分たちの生活を見つめ直し、相手の立場を考えながら思いやり的心を持って接することの大切さについて考えました。



さて、明日から子ども達が楽しみにしている冬休みです。過去二年はコロナ禍の影響で、年末・年始も自粛ムードでしたが、今年はウイズコロナ。第8波の影響を受けつつ、従前のような年末・年始になるのでしょうか。しかし、規制が緩和されてもコロナが終息したわけではなく、一人一人の主体的な感染防止対策が必要です。また冬休みは、生活習慣の乱れや金銭トラブルにも気を付けたいです。感染防止と規則正しい生活を心がけ、しっかりと自律した冬休みが過ごせるようご家庭でも声掛けをお願いいたします。

「来年の干支(え)は…？」と、この時季はよく耳にします。小学校では、毎年5・6年生にその年の干支生まれの子がいます。「十干十二支(じゅうかんじふにし)」を干支と言い、来年は「卯(うさぎ)年」になります。十二支(じふにし)の起源は紀元前の中国。当時は木星の動き(公転周期12年)に合わせて年数を数えており、子から亥までの12文字は数を表していました。中国後漢の思想家である王充(わいじゅう)が、各々の文字に動物を当てはめ、人々が覚えやすいようにしたと言われています。十干(じゅうかん)は、10日間を区切りとして1日ずつ名前「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」を付け、10日を一句、上旬中旬下旬で一月と数えました。日本では、十干と十二支に加え、古代中国の「陰陽五行思想(いんやうご五行しきょう)」を取り入れ、独自の干支が考えられました。十干と十二支の組合せは60通りですから、同じ「卯年」でも5つの組合せがあり、60年でやっと一巡して「還暦(60歳)」となります。

「十二支」の順番が決まった昔話はよく知られていますが、実際はすごく複雑に考えられていて、月や時間の他、運勢などにも使われ、私たちの生活に深く根付いてきたのだと感じました。

日本では、干支はウサギからイノシシまで12種の生き物ですが、タイやチベット等では、ウサギの代わりにネコがいます。中国や韓国では、イノシシはブタになり、リュウ(龍)はアラビアではワニ、イランではクジラになります。西洋では、干支ではなく星座を当てはめ、同じように生活の中で使っています。「干支由来」も色々あります。例えば「阪神甲子園球場」。完成した1924年は、十干の甲と十二支の子で「甲子(こうし)」の年でした。干支の最初の組合せで縁起がよいと、球場の名前になりました。歴史的には「戊辰戦争」。大政奉還に不満を持つ旧幕府軍と新政府軍が各地で戦いを始めたのが1868年。「戊辰(つちのえ)」の年でした。

2023年は「癸卯(みづのう)」の年。卯は安全や飛躍の象徴、癸は物事の終始の意味があります。「今までの努力に自信を持ち、しっかりと飛躍する年」とでも言いましょうか。子ども達はそれぞれ進級し、特に6年生は中学校へ進学する年です、子ども達が新しいことに挑戦し活躍する1年であってほしいと願います。

校長 波多野 暢 教職員一同